

匠、瑳探訪

②

サクラとマキ

サクラ前線の北上とともに各地でサクラの話題につつまれる季節となりました。

市内でサクラといえば、まず「黄門桜」でしょう。このサクラが話題になりはじめたのは、30年ほど前からです。昭和49年から旧八日市場市で始まった市史編さん事業の調査で、記録がみつかったことで注目されるようになりました。

記録によると、徳川光圀（みづくに・水戸黄門）が飯高を訪れた記念に植えられたとあります。実際には光圀一行が江戸か

ら水戸へ帰る際に下総の寺社を遊歴したわけで、1695（元

禄8）年のことでした。この記録は、その約100年後に飯高寺と水戸藩との結びつきをまとめたものです。他の記録では、サクラは光圀の意向を受けた佐原村（香取市佐原）の伊能権之丞（いのうごんのじょう）が佐原から飯高の道筋の村むらに植えるように頼んだものだといえます。

この2つの記録では、光圀がこの後2度飯高寺を訪れたとされますが、当時光圀の側近がくわしい日誌を付けていてその動向がはっきりしています。70歳

を過ぎた光圀はほとんど水戸から外出していません。

光圀が亡くなって50年後の1750年代には江戸を中心に、逸話集が出版されるなど黄門に関する伝説が広く流布していたということでした。

佐原から飯高までの間で「黄門桜」といわれるものは、この一本だけです。佐原の伊能家と1803年の飯高寺記録との関連性もみられ、その先には当時広く知れわたっていた黄門伝説があるような気持ちにもさせられます。

庭園木や塀などに見られる「イヌマキ（犬楨）」は昭和45年に、若潮国体を迎えるにあたり県内各市町村の木が選定され、その際に旧八日市場市で選ばれました。

この地域でのイヌマキの生育はかなり古くからみられたでしょうが、記録では1720年ごろ東小笹村（共興地区）で生育されたとあります。新田村の春海（椿海地区）瀬戸谷集落などは1670年ごろからではじめ、防風のためマキ塀が造られるようになり需要が増え、東小笹村などでマキの苗を育て、他村に売ったのでしょう。

市内の植木生産のピークは昭和60年ごろで、その名は全国的に知られました。



防風のために造られたマキ塀（椿海地区）